



18
1245
4

開卷散馬奇俠客傳第壹集卷之四

東都 曲亭主人編次



第七回

七里濱の洪波衆悪を洗ふ
千葉城の土療潮毒を埋む

再説妙算の兼胤の啓行を折戸の頭目送り果ては早朝の炊煙を御
導の爲に送さるる兩個の雜女小飯を薦むその身を起しの準備を
們がらゐる。這面死身の挿は昨夜息子と走して殿注進を
聞きて詳か知る事なる。寔に死身の女丈夫を智慧才覚の逞し
あはれ最愚なる咱們あはれなる餘る所をを試み問はうせん。飲
うら笑ふ。とる何のあつてらん。快々問せぬ。とられて雜女
は比殿より死身の賜りしが。這蒼ふそあはれ。余れを用ひて。別息
子小乞

女史傳第一冊卷四

扉五三三印

まろく。荷桶の容れて擔ひある。薬酒を故意酔筭へ節と那自方名も薦
 めのひの甚麼をあの庵に置れも息子の荷桶の容るも此彼を陀々花酒の
 途を奪て還を求め。その進退料の直るも後学の為るを願ふ巨細の
 不。よ説示のひねと回のちとと妙算の微笑さる。領を身連よも多那自
 方名主従の素より用心深きもの。一旦ち解らるるも飲食の意を附く薦と
 て。件酒の飽まふ飲むもは然れ老尼の初より。それの所以と必ものと。殿さ
 乞ひまろく。兩個の兒子を賈人打扮の灘藏も件の薬酒を擔て。且母這里へ
 卒させ入深し思慮あるとあり。且豆腐を賈ひ酒も沽めて。這三種と貞方名も薦
 ると疑れ。那主従の巨量と一斛と蠟も。尚貯藏の一斛あれ。時時臨て。一
 ら。まの隨ふ酔臥をせむ。何れより。虜ふせ。然るを。酒の
 微め。貯藏の酒ありと倡く。這里の措れ陀々花酒を薦んと欲するも。獨居る尼が

庵の相平の魚料理酒のあつちもあつち。那奴們必疑く。飲むとふも飽まふ。の
 心と緩志。備飲むとの言も。薬酒の效の落もあつち。蛇を殺し頭を碎き。遂に
 出宗の遇へ。如く悔はるのまろく。豫の深念の如く。後の後を考て。那自方
 這地へ來つ。俟てあつち。着る。豆腐も要あり。の。却船藏の豆腐を賈
 ら。形のごと。謀り。め。那主従が折も。這頭を過る。あつち。備圍を空と
 那りて。施す。多うんを。餌を取。洲の釣。と吞れ。魚も。引られ。の
 あつち。造化。那們の運の竭。と。緯。詳小説論。初。曉得。雜兵們。の。と
 なる。舌を。巻。感嘆。と。又。の。左。右。の。程。の。日。の。と。高。く。昇。り。て。か
 妙算の速く。行装を。整。え。兩個の。雜兵。の。引。れ。立。出。ん。と。折。忽。地。肚。裏。か。り。の
 ち。御。前。の。殿。より。賜。り。て。陀。々。花。酒。の。鮮。茶。一。貼。あり。今。の。要。る。は。東。西。か。り。備。返
 せ。と。仰。る。の。の。を。今。遠。く。と。庵。に。送。り。措。ん。よ。俺。が。懐。か。る。と

しかの時臨く便利多ぶ。失ふも多き所べ。然れども舊する重臣を因ら取らんとす。
 然れども件の鮮某のりけり正しく這裡の藏め措けらるるのく不思議の事と獨
 語々上下を引返らるる音不又ある事なれば備置忘れりん候と。その餘の宮も
 棚の隅まで隈も多し撥撈さす既ふと半晌をり。獨心の焦燥の事去向と急ぎ音途
 るふ何時も人を等し置く。よしかければ多し捨て草鞋穿締外外歩引らるる門の
 西折戸固く鎖して蓮蔭蔭うち戴して衝く杖の直に恥ぬ横巷路雜兵二名を連
 立々今宵の宿の何処ぞとち相譚々新権を鎌倉を投ていとけり。案下某生再
 説千世末介并胤の新田貞方主従をち棄したる細轎子を許すの士卒の成りし。
 その身の後陣馬を歩せ夜首の續々急ぐ程の采月二十一日未牌の比の鎌倉
 中を差有ける。いぬ日福草村より首途折走馬の使者を先たて。管領家へ注進
 せし鎌倉の執權憲定入道御堂大之助をよと持氏にえわびて専守の到りと

俟ける。このひもふらひの事。あつちうあつちう。のりさごちうのり。さうやめ。
 向ふ并胤も多し膝を杖めて豫の計畧その圖の中を。貞方并小時種と虜ふある
 首尾を送も多し演説し。女僧妙算が癖の趣をのり難藏船藏等と共侶の深く
 謀りて貞方を他が庵へ引入れる。一段の箇様おひひと。その才覚の捷れと。今見
 は如く述べ。憲定感心淡々。脚邊の大功いへば。ち勧賞ある。年来宿望の
 望まある侍所別當の補せられと疑ひ。又件の妙算と女の僧も。その功賞と。死
 の是亦宜く脚沙汰あべ。就て老老執思ふ。那貞方へ幻術あり。又時種その脅
 力せの敵と。つえたり。一旦藥酒の酔も。輒く虜ふ事と。久しく獄舎の敷糸
 措いその藥毒のやうな。醒て逃ぐる事あり。やせん。徒れが。頭を刎る。福の根をぬ
 の。然れれば。日も凍たり。脚邊も人馬の疲勞あべ。今宵のそ。終と。成ら。と。翌午は時
 なる。七里の濱を誅戮して。首を實檢入れ。あつちうと。たの。諺て。走ら。る。患ひ。形。且

あまの趣を老禿宜く披露ふ及々馳て御前へ召居べしとの折見参るもめとて丁寧か
意中と示し七形のぞく相計けり然程小鎌倉の管領足利左馬頭持氏主の憲
定入道の披露ふよりよと詳かきて喜悅不堪とて兼胤小對面とて末廣の
間小出坐ありしを執事上杉憲定入道長基を首とて家臣石巻佐氏憲
安房守憲基の子を自餘の近習も扈從とて整々とて羅列れり登時千世木介
兼胤の召れて拜謁する程小持氏招近つて這回大功の趣の執事の披露ふより
具小の事新田世々の難言れが追捕忽ちありしと自方隱形の術ありと考えて有司們
擲捕ふとめとて十餘年と過せし和殿一己の才覚とて自方并小時種と軌く
虜小あつるの賞さるふあまの事則這回の忠賞とて侍所別當とさげふよりよとて
職小就くべし抑件の職役のむり右大将頼朝の時和田左衛門尉義盛とて初々
これ小補せられし小後義盛親族の眞意小中折且とて職と辞とて管居りし程

梶原景時とれ伏しと假ら當職よりよ義盛の服闋とといへとも景時押へ散返
さき二世將軍頼家の時梶原一族滅亡とて義盛稍その職小復りしと異代が先蹤
かの如く容易くしつる重職されし和殿を秘心訴し七望まきとて守りしとて元
ざりし又那福草村の妙算とて女僧の和殿を次見助しその功より褒美の宜く
乞ふ依るべし并の女僧が兩個の兒子荒海灘藏船藏等の計謀小樂りしとて久が
親妙算と共侶の恩賞の沙汰あるとて義の執事小談せしとてそれらも存厚速小
軌小の事の新田自方主役と誅罰の事と他の素より和御あり藥酒の心を氣を
失ふとも時日を過ぎる由彫小似たり明日刑戮あるとて執事の事小任と和殿の
義を奉り細時種共侶の七里の濱を頭と列へ専非常を敬言とて等閑を執計しとて
丁寧小宣示して氏憲とて當職補任と自方誅罰の御教書と此彼三通を遣与さ
しけれし兼胤宿望一時小遂て依然とて受戴れ飲ひと述言兼しと馳て旅館小退り

けり。悠而千葉介兼胤の這夜もその身之士卒もと生虜貞方主後と最の駁争く成
 らう次の日巳時の比より七貞方主と畑時種と細幡子小乗を隨許其の士卒の
 うら田七十里の濱の岸の居させその身馬の乗りて法場の赴く程ふれを鏡を
 彼此人の各足を空おし走りてその邊を取奪の聲は此の皮の附く蟻よりもきりけや
 その中を親ん為るるも必しも來ぬをて路をりぬぬのあめわけ建を勝どつらくと噫
 斬首自方主然も新田の嫡流也南方武臣の棟梁を冠位四位の少将なりふ
 枝揺ふ搏く九萬里の道遙とと大鵬も既小羽翼を喪ひて蠟娘の為小征せらる
 那白龍の魚服を余且の細いからせん項羽が力山を技はもその勢ひ窮りく鳥
 江の舟渡さ由中はれ畑時種が忠と七且勇るも現片糸の線も成らぬ孤堂の
 鳴り回る新田の族の今ある時の絶果ぬんと噓けり傳り程小妙算の那雜兵們
 とら連立り日毎小路を由ぬる只管ぬ走りて這日巳時の半比鎌倉着記りも

躬兼胤の旅館不到兼胤の既ふも貞方主従と誅戮の為七里の濱邊へ赴
 たる折々のみされ妙算悠と傳せり介の身も亦多那里へ赴きてその為体と親
 はる後々までの話柄もさても言らんと辨果もさる這果もと殿を俟んぬ要ありと
 ありあるを雜兵們の耳に又立寄り走りて件の濱不到り既亭午の比され群集の
 推も分が然とも上の威を假ら回近く進もさる容易勿くはたさる得小出
 家の憚りもさる刑罰の場を露ととを執んとの相應ゆれ程を所不鳴立て瞬も
 甚し願窺り時ふ應永十七年秋七月二十日あの日朝より天結陰て秋氣猛肌
 膚寒く濱風大く吹暴れれば岸打波の音凄く沙石の空宙吹賜らる人の面を
 撲りて群集の衆人海堪ごと威退れて磯馴松を盾とて見るもあつ心弱なる
 見果ごと家路を投て還るもありそ中妙算の風も挽まき波も怕れ人の杖
 疎あるものと倒れ身の幸ありと思ふもの進まけり既時刻より一ふ千葉介兼胤

秀奈河ハ
 長脚不其
 業之内
 形と造り立
 たるの又
 明製は場
 の没奈河
 ありの製
 作酒不其
 異三波
 奈河考一
 編あり今
 又の考
 世也

一そちげぐ。わうち。のちひとせん。エセきまあり。いさやう。年か。いさやう。年か。いさやう。年か。
 士卒小下知く四下小近は衆人ど拂ら。その刃の発小尻を拭て。そく非常と警言は。雑兵
 を慮五十名白樫の棒を遣錯と。埒と人どを看。登時兼胤流下知く。貞
 方主と時種と細轎子より牽出さうと。敷草の上を坐する。氣息の暢ふのそこれいふ
 多て跪坐く。小錯のれ。放せ。忽地の礮と倒れ。酒を盛る。没奈何の場。小異
 ぬれ。兼胤を焦燥。雑兵の突立。棒二條より寄せ。西二段小伎せ。貞
 方主と時種の胸と背小推加。七俗小突張さうの。像く小操り。ちけい。かう。な
 倒れ。むけり。荒海灘藏船藏の母妙算の功より。豫より主命あり。その日。創
 手より。細鏢の甲を。臙眉と。糾芒の禪精悍。一。研柄衣。脩刀を。明晃々と
 抜放。貞方主の背の方へ。荒海灘藏杖より。又時種の身邊へ。荒海船藏
 立。たる。その。絆の。為。体。凄。く。も。亦。哀。れ。る。一。と。怒。人。各。々。胸。を。冷。と。竊。彌。陀。仏。弥
 陀。仏。と。せ。う。く。唱。る。の。も。あ。り。或。ハ。涙。所。ぐ。せ。背。向。する。も。さ。う。り。け。り。然。程。灘。藏。と。船

藏の貞方主と時種の項の後も極揚て雙方齊一合直ま刀を以て振揚て既
 動と見果る。毛刀の光の疾電も。い。の。時。速。く。も。猛。吹。者。暴。風。天。と。ま。た。地。は
 動と小山の像に洪波。澳の方より突然と。七果の濱へ。ち。寄。る。疾。と。死。筋。の。如
 一打洗て引返。激浪怒風の勢。い。誰。一。個。も。脱。免。死。斬。の。の。斬。の。の。貞。方。主
 従荒海兄弟女僧妙算。い。の。之。誓。言。固。の。士。卒。幾。十。名。猶。且。群。集。衆。人。も。残
 忍。れ。て。哀。れ。を。知。り。他。の。患。を。樂。む。の。の。成。這。洪。波。の。為。泥。泥。られ。澳。の。水。肩。あ。り。お
 け。の。故。兼。胤。亦。脱。免。路。の。き。れ。齊。一。波。の。底。小。論。も。士。卒。と。俱。死。な。る。り
 一。海。よ。も。暴。浪。の。多。も。ち。揚。られ。濱。邊。の。松。小。樵。苗。の。死。な。ら。ず。と。な。れ。も。さ。う
 潮水を飲。れ。る。要。時。息。も。絶。る。似。く。これ。あ。ら。わ。り。け。り。地方の民。小。抱。せ。り。さ。う
 稍人心地。い。つ。れ。け。り。那。高。濤。只。一。度。も。濱。邊。一。町。過。さ。り。け。り。里。人。の。屋。ま。ど。損。ふ
 正。の。ま。り。一。兼。胤。の。を。さ。り。か。く。人。馬。を。波。小。樵。獲。れ。身。小。後。す。の。る。な。り。け。り。浦

女客傳第一冊終日

六

手帳五巻中終日



水鏡第一集卷四

七

有像第十



雨原一た後乃
至柔之水
征至剛人
うろこありそ貝

水鏡第一集卷四

有像第十

邊の民を送られ、獨旅館のりまを留守せし家臣の任をなす。那水は火を知り、左の石
 象を背つて胆を潰して、怖れなきもの多し。はるかにと兼流の氣力をなく、定めて左の石
 さる思惟す。許りの玉平と喪びし惜びも、あつた。緊要なるは、負方と時
 種さる波濤の捉られ、首実檢入る。由多し。願ふ難救船、城の那主後を識せ
 たる秋のまゝの誼及びむ。俱に波底に論を、彼那高濤のち、雲せし。以てひそく
 速を、瞬間のまゝのし。をを認志、俺も亦水の溺れり。多し。誰よりこれを知ふべし。
 然るに、負方も時種も、奇方の酒毒醒るとも。そふふいとも緊し。細めた。一とを
 れ、人より先息絶え、その誼を疑ふべし。これらによせ、も繕ひて、あつた。如と
 あつた。尋思と、残の寡に、士平五六名を、病苦を忍びて、その曠昏の執權、實
 定入道の宿所、赴た。那水の、緯の顛末、箇様々と、告訴し、負方も時種も
 波の捉られ、る。況、士平、一人として、脱れ、の。下官、さる。溺れ、幸、い、

九死の中、一生を、ぬく。ひなされる。負方、時種、の首を、撃ち、後、それ、誅戮、の障り
 る。一口、その首を、失ひ、これ、実檢、入る。その、まゝ、老の、執成、を、仰ぐ。の外、を、い、と
 実支、虚語、ち、雜て、か、多、く、演、る。憲、定、入、道、ち、驚、び、て、以、難、る、眉、根、を、擡、り、昔
 より、七、里、の、濱、へ、然、る、高、濤、の、寄、せ、る、の、す、も、及、ぬ、椿、克、然、に、れ、負、方、時、種、の、首、を、
 撃、ち、れ、後、も、亦、怪、む、足、も、ね、も、悔、も、先、例、の、任、に、件、の、主、從、を、那、濱、邊、を、誅
 せし、を、思、先、が、脱、落、せ、ひ、れ、と、さ、る、ふ、と、推、て、も、あ、る。負、方、の、幻、術、あり、火、の、遇、へ、火、の、隱
 れ、水、の、あ、へ、水、の、隱、と、豫、も、他、の、さ、る、ふ、と、さ、る、ふ、心、つ、た、ま、て、海、邊、に、牽、由、出、させ、れ、既、お
 その、牙、の、死、ま、る、と、さ、る、竊、の、祐、る、邪、神、あり、波、を、起、し、人、馬、を、損、ひ、為、お、怨、を、復、せ、汝
 是、も、亦、知、ら、ん、と、且、近、屬、小、坪、を、漢、者、の、説、と、て、人、の、嚙、守、ふ、事、あり、昔、年、正、慶、の
 鎌、倉、攻、め、新、田、義、貞、進、を、難、て、海、神、の、禱、る、と、あり、貫、金、製、作、の、大、刀、を、解、て、投、て
 波、底、に、沈、め、る。稻、村、が、崎、干、瀉、と、り、て、その、隊、の、軍、兵、障、り、を、鎌、倉、攻、め、高

時滅亡せしより世奉て知る所々介ふ後世件の大刀の化と金龍とまると稲村が崎の
 渾水在り漁者知らざりてその所を犯せし必出宗ありとのりひま虚実とまらねども倘
 果とてその夏あふ件の海龍昔縁と感とて爰あ做せり他貞方主従の為出宗茂
 致せ欲凡慮の及ぶ所あつた然れどもそれらのよと世の人不知せり新田の餘類と憑
 ぎとあふのありあまきえ秘て奴々洩せざりて因て思按と旋まふ一時の水災ありとて
 當家系代の怨敵多し新田の首級と暴清小捉れりるまると京鎌倉のあ威
 徳の薄深似れが愉快らる幾那首波清引れて一旦海論むとも日と終り必の
 浦あつ流れ寄るとまらざりてと取あて梟首女世評も亦定て人の疑念と雲存まふ足
 りん這首よりも近国海邊漁村下知志御邊も亦と意と着てとて穿鑿
 肝要とんと意中と盡すと論やと兼胤僕心むるて歎びと述別を生と旅館還りて
 又あふ貞方時種の首級のみ破られ歎研れり一歎今も知るよるれども執権の

つれよりと為雨小まもあつた備やとあつた次の日より士卒を近海邊遣新田貞
 方畑時種等が首級の流れるとあつた快取揚てと来よと部と定めと涉獵せし
 第三目の朝七里の濱へ赴ける雑兵が那濱を搦ひと道俗二個の首首と来兼
 胤歎びを芳ひて一箇々つたれとあつた悪魚も傷られしはれも向小疾あつて見定め
 たり似れどもあつた疑ふもあつた両箇の首の灘藏船藏髪多し首の妙算と這時とそ
 兼胤の日の妙算と到着して貞方主従の誅せりるとと濱邊小あつたより兩
 個の兒子とあつた折波濤小捉れと徳きりて初て暗得と敬篤の言不出と倒れ外
 聞たりと擗遣と吐裏小あつた這親子の軀の失せて首の故の濱邊小寄りて悪
 魚の為小噬飲られて不具とあつたこのあつた後と又流ると流寄とあつた
 のこる貞方の首と宗より這灘藏船藏髪多し面小傷とるを幸ひるまるとこの兩個の
 首と貞方時種の首級とを票と実檢小備と復掩面と起志一吁介とると尋

思ふに計校既決りたるに、あつちの 駒之件の 兩個の首を 首樂の 斂め士卒の ありと又憲定に 此宿所に 赴け下官連日彼此浦邊に 士卒を 出置て下知の上 旨の 困る形を 計せし今朝も 七里の濱邊を 這面箇の首級を 獲り悪意を 思傷ら 此彼共小癩の 安定を ぬれ似れども下官の 堅定仕を 疑ふもあらず負方時種は 首小をひよとて実檢を 入れ為の 據を といと実京の 誘て面箇の首函を 一つ 憲定入道の 感悦を 一人の 老拙の 檢見を 猛に 席を 更に 老當を 召近に 一箇々々の 首函の 蓋を 用と 熟視を 既に 久く 潮水の 漬りし ちち傷さ 首首を 疑ひ するも ありし 兼胤の 認り 今も 虚実を 糾す 要す 一つ 鼻首を 世の 人の疑念を 評論を 解散と 之を 泰平を 一つ 事を 詰り 向に 忽に 荒介と ち笑て 千葉殿と ともの 入り 御邊證人を 是を 負方時種の 首級を 誰か 然ら 潮水の 艶艷を 傷ま 古例に 任じ 上の 実檢を 使は 濱邊に 鼻

偏に 障り 鷹揚の 首級を 返し 與へ 兼胤の 果を 馳て 七里に 濱邊に 赴き 士卒の 下知と 面箇の 首を 取り 鼻を 具し 此を 成れ 雜に 兩に 名を 留置て 身の 旅館に 還り け。這日も 一つ 件の 鼻首を 親の 爲の 批評と 半信半疑を 稀に 中の 始の 情由を 知り ありし 友の 耳に 千葉殿の 計策を 旋に 新田主従を 虜に 陽の 忠義を 陰に 栄利を 遂に 海神の 出を 遇て 幾十 名の 士卒を 洪波の 喪へ 懲り 上を 欺り 歸参 家隸の 臆を 首を 拾ひ 負方主従の 首級を 詐り 稱し 濱邊の 鼻首を 獲り 一人の 今戦国の 常情を 就中に 甚に 僻事の 又に 那妙算が 奸智の 長を 佛門に 入り 夢想を 假に 托て 人を欺り 兼胤の 資を 那奸計を 領主の 忠義を 爲す 兩個の 首を 歸参 願ひ 果を 所を 爲す 因果を 觀面 隱匿の 報を 越す

脱れ親子三名横死七祀に鬼とあるものなるに子灘藏船藏の新田殿主従の身
 代り立られて鼻首せられを斬懸え道理中と推せ兼治主の終る所又是の事
 へんん怖れと丸弾とて敷せとぞ。試小同世の着官前卷よりあり。夜永十七年七月廿二日
 云云の節新田とく嫡孫謀反と起し廻文の軍兵と催されれば鎌倉の侍
 新田兼光兼光の生捕ふし七里の嶺に討て兼光の末流治とせしは南朝
 武臣徳小又これを載て負方云云永九年没落奥州同十七年七月廿二日
 害年五十五今人の鎌倉小あつたすけつたのねん兼光の末流治とせしは南朝
 説くより右の舊記の浪義之 問話休題千葉兼光兼光の宿望一時小遂く
 既小を侍所別當ふるより是より鎌倉小在勤して出頭せとある由似き。年
 八月初旬より顔色漸々小蒼赤て身體總て浮腫けれ鎌倉小名高は醫
 師と此彼と招れよせてその宜に就て服薬を醫按られも同勤せの凡水折海
 潮と多く飲れ潮毒の致す所病症輕たあつたひけり。これ初て駭怖れ療
 養由ぬるりかども聊の效もあられ名僧驗者小答を徵め這里の護摩那里の

加持とて祈禱も術と盡すものなり。これ此の驗もあつて起居小杖けれ只煩悶
 して沫と吐くもの然して死をせ生もせし候る在勤するに身小暇を賜る。か
 と一冬千葉に還りて之を將息をせり。病苦の身も退き左右も程小年小暮て
 春と迎へ夏も亦も。有恨の病着の疲勞に勝る小けり。小今茲初秋の比
 板久の浦小漂流の外国人あり。安南国の醫士也。修治小長と云え。小
 兼胤則老黨某甲と遣てその身の病症候と告て治方を請問せ。小其人曰て
 答ふ。潮毒の草根木皮のよ治す。病小中其の身に土中に穿埋て一々を
 経ると死の毒あつて掃除せられ。恙を去る。壁言の塩魚の塩を抜く。その方こ
 こと一致あるも土療を甚既小其月及び。小其の效もあつ。然ともあつて
 死と等し。鬼按小徳ん。小其の修方の任りて言詳小傳授せ。小老黨
 悦の夜の目も馬を走らして。小其の件の醫按の趣も箇様々と注進を形れ

正しく執約す且方一間大櫃を作とる内、兼胤を杖客に安坐せしめ清采死
 土をのりともも。櫃の容れ主を埋め、只頭顱を露路に。時小七月廿二日、けの黄氏景
 緯成て男女の後類夜と共守護と明を候程。廿二日の朝に至りて兼胤の面の
 浮腫大なる程に退死。蒼蒼り色に白くする。原来に潮毒の解散ありて、
 衆皆齊一相賀と扶けて土より出さん。立鬼を角とる。何の程か息絶て冷
 なる果。もろもろ人食駭駭然と依土より穿出。又病林に臥させ、灸と鍼と樹と
 盡せども三魂六魄既去て空蟬の殻とる。や人の甦生えたるを、果の悲愁の
 諸声立て泣く。外の多のけ。是を奸詐の悪報。得偶然知る。自ら方主と誅
 考る。その月その日周の夢で身を生る。玉中埋れを、尻の息絶する。宛罪人、異る。た
 亦一奇事。そのもの。夫天道の善の福。又淫福。淫福。即陰匿。あれ。悪。この。七
 淫との。深意あり。悪の素も。王法の免さ。所。天誅を俟。及。淫。竊。候。

所故ふ人れを知。所云隱匿。流行。僕幸。免れ。天。禍。降。せ。て。成。る。
 古人の格言妙き哉。む。少納言入道信西の博学。多の禍。快避んと生る。身と
 土中に埋めて。母福と脱れ。る。兼胤の。似。後千葉介入道常瑞の時。至て
 亨徳四年八月中旬。一族原越後守胤房馬加陸奥守光輝。攻撃。て。は。子胤
 直と俱。自殺せ。折家の。舊記。多。焼。那陀。花酒の方。書。日。這兵。孫。火。焼。亡。て。
 傳ら。る。あ。死。の。後。の。話。説。る。因。あ。具。ま。も。勸。懲。本。つ。げ。る。
 第八回 衣箱を啓れ。小六遺書を得。癩疾を救ふ。著演銅并を失ふ。
 応永十七年秋七月下旬。新田貞方主従の事。近郷。隠。れ。彼。報。此。傳。々。
 世の人。喋々。考。く。の。以。て。罵。る。異。聞。評。論。區。々。の。け。俵。程。小。藤。澤。野。上。大。某。者。
 演。が。宿。所。も。多。く。の。支。の。多。く。母。屋。の。知。を。あ。り。不。這。月。二。三。日。の。朝。の。例。の。

つらえ 又發すとの堪らざれば早飯の使者もあらず。そと終子舎小退て且持息
 程小と午後より日れ女婢們的送代湯液を薦め白粥を養めて懇小同慰
 りてその中に一人があらう。其の言せぬまじき小鎌倉のいと哀れあるのゆへに其を義
 貞と名の死孫多。新田左少將と名とあしん。喰れぬ主治二名を千番木介兼胤主に生拘
 られて七里の濱を斬られぬ始といへば終の箇様々々をそと畑時種のりまじき
 子に習俗ゆて向きぬの長女多の母屋の耳と歌てあそむ苦死胸よりのゆ放さまじ
 心の駭死額を枕推駕て俯々竊ひ必多。貞方さの新田の嫡流皇裏の古殿を
 共召小陸奥ふとすなれぬ。自方の離散せぬ御きて東と北立別れ落さるひ
 年如干音信望えざるゆへ。かき浮世小在る小春の天のひ花復開。御武運の
 時もあり俺が郎君の資助あるをぬんと。瀬より小もはる。屠所の羊と做果て七

り 里の濱の虚府貝各の送しぬんと痛すゆ。よふ岩堰水と涌え。羊行の涙の
 涸ぬ息憂苦病惱極と腸と必死の勢ひ云とるふ叫ひる。声と這世のるゆ
 夫婦も走り来て且驚死且動。抱起し喚活せぬ御盡せ。脈絡既絶果され
 復生もあらず。折ら小六も宿所の。這朝貞方主の風声をきき。獨り
 驚嘆た。音細たを知ると。例の柱古小假托。鎌倉武藝の師範上泉秀
 武許赴て四回八表の暗譚の次小自方主従の。執権憲定入道の家の中秀
 日の高波小自方主従の首級亡骸の。人馬を運ぎ止めて女僧妙算その兒子荒
 海灘藏船藏も底の水屑も。獨兼胤の死を脱れて病と旅館小在る。其の詳
 るければ慷慨の限も。色も。辞別と還る。貞方朝臣の俺が

親の古主と再従父兄弟とをなす新田の嫡家より勢以踏まある昔思送徳と
 念ふの爲此彼とあつりあつる能く時種一人を従へて漫然とあひひつる
 兼胤の妻詐を怖る女僧妙算が邪智逞た伎倆の程を憎れその根を鋤て枝
 栄を左も右も新田氏族の忠孝節義のれれ誠と守る神もまぐ日月も照らぬ故と
 世に憤り意中の速懐真奈堪は果敢と取去向の路の枯木の枝小屋鳴く鳥啼とせ
 常と報る秋曇り天さへのを以負半晡の北山下風露け袖を吹拂ふ糸染々と冷す
 胸を連ぬち騒げばを平きとあふも病病する母の心あわれ見よと歩運を
 急ま程は前面より来るのありけ。されは是別人る。野上が家小所走り近つる音か
 け。噫令郎只今遠くせ。我々我々の家公吟附れて死すまある。実の母は枯葉
 正。既に絆絶あひつ。快く還らせあつと報る小六を面色の変れるも駭か。之を夫
 事物とるるふ又回復の道もなき。二十町餘れる路を飛ぶ似く走りつ六件の小所小

先もて。宿所ふる。老の老。子合ふ赴て。極遣る屏風のうら。あゆめる人
 ねら。ころく。枕外と母の空に散と動と声を幾と泣けり。あの時著演晚
 稲の小六を候て。這果も。共侶不諫め。契と母屋持病の特小劇。猛不危
 窮か。鉄及茶餅も。屈申。爲体報知と。遺憾。理り。女々々。歎
 亡者の迷ひの種。揚家と。自志。孝の終り。と。あつる。愛
 と。跡の菩提。用ね。小六と。涙。林。仰子。ひ。親。先。子。の
 後。凡。世。の。順。路。を。歎。思。察。似。れ。尚。老。朽。る。身。中。の。年。來。言。病。不
 以。を。憐。れ。と。あ。ひ。も。子。を。漫。不。出。臨。終。の。遇。ぎ。の。悔。の。後。を。も。の。ろ。ろ。と。忘。れ。ん
 這。意。を。猜。し。の。下。と。の。余。然。を。と。著。演。晚。稲。尉。難。て。共。侶。不。露。た。袖。の。滴。手。不
 申。ぐ。誠。心。の。表。裏。と。の。多。り。の。是。より。小。六。と。日。を。經。る。ま。も。心。の。哀。を。方。を。只
 親。父。母。の。意。を。介。と。慎。し。め。言。ふ。出。さ。著。演。の。亦。を。意。を。返。て。裏。事。の。英。直。著

己目の為体小異るるに第三の黄負不極と遊行寺(送)程重入人の肩のこの這
 回も一千餘名あり。昔金坐の英直と合華と過七の追薦讀経形の如く修行の
 心と盡すもなれば小六と養家比一方の洪恩篤義と胆銘心小刻と感涙の
 夜分枕を濡まきで獨つらむ。何の時も這大恩を報ひたさるるを
 久後と定め難く不樂の程小六が師より息武者助秀武も八月初旬
 より風の心地とち臥せし老人の健より頼む足ぬの病と十日可と身
 まるるを憂ふ小六と堪忍と且悼と失時の憂い除き又心裏と累と折は
 くと棺の繩を束所を恨みその子秀時消息と心誠と表けの然程小天原渡
 正吹風寒く夕露敏く篋子の下小鳴く虫もや聲も弱りも秋月中漸小六と母の
 中陰果ても有無無電と程小六一日入必母方身の衣も皆る東西るといふも
 年来親と使れる女婢們の像見とと取をせぬと何し麻袋籠あると今

この暇を折取分ち置られと尋思と身と起と衣箱の鎖と解披衣類此彼
 と出とるふのと固く封とる袱包一箇あり取揚てるふ重や何少あんと訝り
 封皮と折して推披は一尺短刀あり小牌と結着て右少將の祝紀念菊一文字と書
 を下小分注と之位の古殿四国下向の折吉野の朝廷と恩賜の御劍是とありと
 のこと。脇屋刑部卿義助卿といふも奥国元年小那御越の黒丸の城を抜
 吉野の内裡小参上更小伊豫州へ出陣ある小折後村上天皇より賜り物あると
 猜せし柄の玉成を夏電と推並とんる白敷之鞠の黄金の莖菊と抜放ちて熟
 視る小刃の長一尺ありる。合直の鐔下より刃頭を入と視る小明と光々と秋
 天小新月の雲を拂と顯れる如く冷ると凜々と冬山を積雪と日斜と映は似る
 我大皇國の鶏九時鳩又唐山を龍泉太阿も是れ優ととぬふる數面歎賞と
 收めそ依れを側小窓にて亦復包の内とる小包の金子あり其の年某の月日右少將

あつちをもちとちえうまへ 予考あつち
より預りたる所の要金二百兩と記着る。さしけりる東西多る。是も合て一所の措き送り
れる一種と取揚る。一巻の書策を腕と繕じて閱する。あつちを紛る。あつちを紛る。あつちを紛る。
多る。内中巻篋。一封の書翰あり。小六さへ。そまらる。母屋と標書せられ。あつちを紛る。あつちを紛る。
評し。由の邊く封皮を披いて。首より尾まで繰返し。又巻返して。讀む。あつちを紛る。あつちを紛る。
今ぞ知る。小六が生来細事。襦袢の中より。英直夫婦を傳せられ。あつちを紛る。あつちを紛る。
折英直が密意の。是より以来世に潜る。小六を俺見と詭唱へて。許す。あつちを紛る。あつちを紛る。
又假名川の旅舎を。英直が臨終に送言せられ。輝の頼末。あつちを紛る。あつちを紛る。
八ふさの。比あれの。よと報き。あつちを紛る。あつちを紛る。
一の理り。あつちを紛る。あつちを紛る。
られて。あつちを紛る。あつちを紛る。
知る。あつちを紛る。あつちを紛る。

幼少より。最も。伶俐。きほせ。二八の時。候とも。あつちを紛る。あつちを紛る。
て。古殿の。仰。あつちを紛る。あつちを紛る。
折。あつちを紛る。あつちを紛る。
とも。あつちを紛る。あつちを紛る。
進退。あつちを紛る。あつちを紛る。
忠貞。あつちを紛る。あつちを紛る。
然る。あつちを紛る。あつちを紛る。
一箇。あつちを紛る。あつちを紛る。
衣箱。あつちを紛る。あつちを紛る。
哉。あつちを紛る。あつちを紛る。
金。あつちを紛る。あつちを紛る。

ゆみ月や窓の
忠意不滅
遺墨如談
影は鳥の跡

お由盛

有條第一



芥子園
畫本
國圖

小六



七

号年五堂印發

俺身を野上よ託りて程嬰杵臼も及ぶ遠謀遠慮傳早之況母辱慎三深始
終良人の送命を守り忍びて馬脚と露まその身の命長くと豫の覚期小書
一這書翰よりいふて俺身小実の二親の在せとよく知りあはれ任せ
金句毎錦綉るるぬり俺生れ比母御前の世と去るぬり先君子の陸奥
落さるぬりまきおほえ強裸の中より錦妻婦守守字れる小六小六の名も相
此の主従りしとよもろび田舎の育つ鶯の昔巢の中は杜鵑親るぬ親と親
成長りて潜世の起住はいふぬり礼中則八母も慈母乳母も亦母之類育
来の幼分も思ふ恩高るる再養父母も思ふ何ぞ不取と家隸といふぬ
已前那藤白安同の這里来ると扇観折俺年甫の九も親の古主の冤家
思ひけれ躊躇て敷も果さ目免ぬ今又思ふ他のより金足利氏に君父は
心と盡まると討とてけり腹極研てこの這身も大日本の豫讓と做て己
の然れ養

家の思入其恩恩とまむ報を身とる隨ふるむ君父の忠孝ありとも
為不義をいと恩を仇と復す似たり忍びて死を忍びて志も致す
恩の時と俟ては這大望と果せ先考先妣父母夫婦爲靈ある某が
聴ぬ悲しむと身を投附と云ふ出さぬ忠孝節義の智慧も忠孝
まき男子が鳥屋出の雁鳥の修むとみぎら攬鎮て窓小胸ぞ定め
片竹の世の真愛のまき限りあるが十二月の初旬に至りて小六も母の
泉秀武の眷属の故郷へ還るぬ又鎌倉の文學武藝の大なる
に學得るるこれ其後宿所在て讀書小古人と友とら獨鬱胸を慰め
けり明れ応永十八年ぬ年小六十七歳奴婢之助を八才ありけれ小
ひて著演の春の比より奴婢之助も習せ讀書小六誨えよ実語童子
學の窓を倚りけり然れ小六も奴婢之助と實の弟とて親愛尋常
のけり

ぬひのすけ 小六と昔本で骨肉不異るを言ふ是れ就死彼死するも小六の母屋が存し時
 奴婢之助も亦小六と昔本で骨肉不異るを言ふ是れ就死彼死するも小六の母屋が存し時
 こもまればいひ出ても勢た言信夫がらぬ又今も思はれて心いぢらぬ男子も四方の志
 わり女子の封境を志とふ時不祥の事あるも他の年来往方と志すは唯の還て家におり異
 日りの志願を遂て鳥の籠中を放れども四方の遊歴を志すは唯の還て家におり異
 環りも亦然の遇の事も存しと知るこも口は他三親の徳義を報ふべしとせらる
 然る折も欲得と念はるる今この折も欲得と念はるる今この折も欲得と念はるる今この折も欲得と念はるる
 藤白棚九郎安同の星義隆主と敷捕りて年来鎌倉不在勤程の便任利
 口の小人をいへ生平小の君の徳を知りて徴せられも献するもの又と執権に任じて使は
 と奴僕に似たりとせらるる前代満兼の時もして漸く用ひられて當り所あり當主持氏も亦
 られと欲じて去歳の秋九月の比相摸の眼代をせられ馳と受領して隼人正の外の外は是れ
 民の威權あり折るも檢の爲とて國中を巡る所も毒流と民の膏腴を絞

戸の八人合怕と虎狼の如く役の勝を罪せらるるも三つは程の安同の如く
 と一ふも藤澤と巡歴して邑長の宅を旅亭とら有一日件の邑長とて著演ふり
 年冬の十月藤澤と巡歴して邑長の宅を旅亭とら有一日件の邑長とて著演ふり
 まる。這回新眼代藤白隼人正當郡と巡歴せられて今某の村在在る宜く常例銭を出
 せし先例の所帯百貫毎銭五貫とせらるる。這回十貫文と宛られ野上則藤
 澤南郷三千貫の所帯され三百貫文と出せしと債のせと著演せし後と面正し
 老女を奪う。俺家の鎌倉將軍の始右大將頼朝卿の時諸役免許永代不易の御
 教書を賜りより以来今の管領家に至るまで常例銭をいふ東西の御使
 りも縦古例を蔑如して新法を建りたるも某氏朝臣の死時より前代氏満満兼
 兩管領の御家督の最初毎宜く古例に依りてと定めさせひる下知状あり藤白
 信義を知らぬ非法なり。是則黒吏の尚多しと求むる口は其の欲心細く
 職分を疎る。誰の不直とせらるる其の考るる。義の爲財を惜むる樂く施せ

とも勢利の為不權され。一銭もも費し。且這是非正と後。その理あらうけぬ。
 らん然き決と従ふべし。這義と以藤白主。然と理強死。辨不返さうも。巴長の
 阿容々々と麻堂。告別とを。宿所。却安同。徳々と著演。從さる。答を
 聊斟酌。その大略と報。安同。大々怒。訛言。声。憎。野上。奴。過言
 今も七八年前。比俺。此の好意。那奴。同。安。と。那奴。赴。其の
 折。強情張。後。理。過言。の。捨。捕。鎌倉。牽。去。ん。と。思。ひ。か
 不敬の舉動。今。免。去。ん。兵。們。を。俺。為。著。演。が。宿。所。不。赴。は。捕。捕。て。牽。を。束
 快。と。と。敦。圍。死。巴。長。の。一。兩。個。の。故。老。と。共。さ。推。鎮。め。を。憤。り。然
 る。當。役。初。度。の。御。巡。歴。御。士。と。罪。を。い。ひ。上。の。御。沙。汰。も。あ。る。且。那。史。先。祖
 諸。役。免。許。の。件。舊。家。の。所。す。る。を。い。ひ。を。礼。を。い。さ。せ。め。う。と。辭。齊。一。諫。め。安

同。僅。怒。り。治。め。肚。裏。あ。ま。う。那。著。演。の。舊。家。と。も。賦。圍。お。せ。歴。御。士。官。事。で。あ。る
 那。奴。の。口。利。せ。ぬ。の。隨。ま。を。這。回。一。談。の。私。の。意。趣。を。も。救。不。權。お
 乘。と。捷。ん。と。現。邑。長。們。の。亦。妙。も。あ。る。異。日。便。宜。の。折。と。二。度。の。怨。成
 復。志。と。尋。思。と。ち。領。に。那。御。士。奴。が。取。り。上。の。罪。免。は。け。れ。も。且
 故。老。の。願。ひ。お。任。し。目。今。の。沙。汰。及。び。俺。歸。府。の。日。お。さ。え。あ。げ。て。その。折。も。あ。る。せ。ん。と
 衆。皆。理。す。と。思。ひ。も。連。累。の。出。示。を。怕。れ。辨。と。書。て。著。演。が。為。お。勸。解。あ。け。は。藤
 白。安。同。の。極。月。初。旬。お。その。役。果。て。鎌。倉。お。か。へ。ま。ら。這。回。巡。歴。の。趣。の。箇。様。々。と。思。え。あ
 ば。相。撞。の。戸。帳。も。お。納。貢。を。増。せ。ま。ら。れ。ば。執。權。憲。定。入。道。を。休。息。志。し。と。く
 飲。の。臣。を。悟。ら。宜。く。披。露。不。及。び。官。領。家。の。罷。遇。の。淺。く。且。休。息。志。し。と。く
 賞。祿。恩。賜。も。多。け。安。同。の。如。く。民。取。り。又。君。得。て。數。千。金。の。資。財。あり。富。貴。隨。ま。ら
 也。俺。今。這。金。あり。と。も。鎌。倉。の。宿。所。も。酒。色。の。為。お。用。ひ。さ。す。の。も。上。は。さ。す。私。怨

ありと出れん故郷へ錦を飾るとの古語もあるれん今茲の妻子と携つて氣賀ふ赴死く
 逗留の程酒宴遊真目を弥らある年来の勤勞を忘るも小樂一瞥べさる猛
 可ふ以起し心永十八年の春三月の中旬願書をたてまつて腰痛の病痾あふより
 采女氣賀へ赴て七温泉の湯治せむ欲しそ五十日の暇を賜り妻子眷屬のへらへ
 大磯小磯紅粉返多歌妓数名ふり多く金を取せ相携つて相模の氣賀多舊宅の赴
 此是より日毎山海多珍味を集る庖厨の玉炊桂を薪の煮れも育飽とを考む
 れの夜も日酒宴を古とす那歌妓們の歌儺艶曲を妻子と共ふ笑ひ與て且這里
 在る程の肆月初旬あつてこの這里まで三伏の夏を銷する足る底倉も采邑され
 那里の温泉の浴つたはの上は願ひ義も稱つたもその準備せよと士卒を底倉へ
 遣ら那里を第一番と考へる浴室某甲が坐席を借してその家の奴婢の主人をも
 他へ移らと安同躰て入替り妻子後類送る成這浴室未聚合と馬鞍者よく思

憚りなき快樂の長夏の日を短くと思ひり却説の頃野上吏著演梅澤多
 通家許佛古又りと招れ本日朝より所要あつて出るまゝの時刻大く後れ
 ぬる今宵の那里止宿せんと留守を晚稻と小六の未女を従者一名名を遠く宿
 所とて梅澤を投ぐ急ぐ程の平塚のあまのうら花水橋の頭を名黄氏目するなり既
 多著演の橋を渡り西折りされいと窶々した社校の橋の上倒れあり立ちと執視
 ば小聊氣息のいよあも呼ぶと心せありうらあも急病の氣を喪ふとあ倒れありん
 と哀の有敷糸の自過りて且従者抱起る懐る九茶とて出で飲せんとれも齒を
 林定と嚙締めえ左右の受まりと刀の挿る銅算とて繞り口を推開し七件の茶を撮
 入れ主従齊一介抱して連り喚活まざる程の社校の稍れありて多動足と縮め這
 主従とるといへども且忙然と登時著演の声をうけて和玉心地いよを俺們的
 路も和玉病臥するお忍びと且介抱する小本復せられ本意の慥へ宿所

近々の送りも届けし抑何裡の人ぞと問て件の社伎の遠く身を轉て其れ願う
 原來の俺為小恩人老るけり恥じたる事。在下の生得て癩痢の病あり。
 久く水とる方と絶持病忽地お渡りて幼稚の時より船に乗らむ水邊にお立よる
 下あゝの身不肖とひきま。做る母の幸きて既にお飢渴お迫りて身を投ふ
 必まらん水と思ひ死持病を渡りて先程よりお來り。這橋の欄干お寄こと
 氣絶してこれもおあて倒れけり。刀袷お介抱せられて惜ぬ命根の蠅
 ざりて面目もあたふおと。啣言がましく女を著演して嗟嘆お堪ま左見右又の和
 主の讖悔不便綴る身お難病ありとも何され彼れ拵は獨の口の鯛を飢渴
 迫りて命を捨んとし。い最愚る事。今より心改めて親お仕て孝行を盡し
 る。必天の恵おあん同胞あぶ意見お就て和睦と恃らぬ亦身を立よるあ
 得ざるお人の身と票て生れ申斐もき。みづる非命お終を取らむ水却浮む願なる

冥府の呵責とせん。いでもあつた事。あつた老婆親切に用ひられ幸ひ
 ろんと丁寧お説諭し。懐を撥拂りて圓金一兩取出。是の些の東西を
 よりこれを本錢として拵が飢渴を脱す。いお軀を取られ社伎の呆るま
 氣色おあられ受戴くと數回稍感涙を拭いて。神も人も棄られ死を救
 る。押も馴染も在。下本錢おせよ。這金を賜。御恩の有。お幸ひ。人
 並お世を渡す。いはおる。い。貴宅推参。い。願。名。生。口。せ。あ。い。
 お。並。有。演。推。林。下。め。と。益。も。多。死。口。誼。俺。宣。後。の。報。ひ。と。多。て。お。方。の。金。を。贈。り。料。
 ら。ご。這。里。で。目。を。消。せ。お。去。向。を。急。げ。お。立。別。れ。い。い。と。お。捨。て。宿。所。も。知。れ。社。伎。の。名。
 さ。里。ま。向。お。ま。く。此。下。後。を。從。者。と。ま。す。の。ま。ら。実。の。熟。比。の。梅。澤。を。投。て。走。り。の。然。程。お。
 草。有。演。の。夜。通。家。の。宿。所。お。到。り。て。遠。忌。の。法。蓮。お。列。折。え。れ。俺。が。刀。お。銅。弁。原。
 來。那。社。伎。お。茶。を。飲。せ。んと。せ。折。お。取。送。せ。と。お。先。を。と。そ。を。於。這。里。お。ま。る。か。る。那。銅。

銅算のりでものり武士のりするもののりがのりまのりたのり武具のりと送のりせのりるのり恥のりぢのりぢのり所のり為のりるのりべのりしのり翌のり日ののりまのりたのり要のりるのりものり

 惜のりむのりべのりとのり思のりふのりもののりうのり夜のりとのりあのりえのりくのり那のり首のり人のりとのり遺のりさのりとのりものり必のりあのりるのり東のり西のりものりあのりるのり僅のり小のり一のり箇のりののり

 所のり藏のりののり數のり盡のりさのりらのりびのりなのり入のりるのりものりあのりらのりんのりとのり思のりひのりらのりへのりとのり從のり者のりものりそののり夜のりののり恨のりとのり思のりふのり主のり

 從のり俱のり小のり止のり宿のりらのり詰のり朝のりののり未のり明のりののり起のりるのり後のり者のりとのり思のりふのりとのり奴のり婢のり們のりののり炊のり爨のり果のりとのり俟のりぶのりはのり宿のり野のりののり

 要のり吉のりあのりれのりがのり辞のりさのりせのりとのり退のりるのりものりあのりらのりんのり主のり人のりあのりらのりうのりとのり思のりふのりとのり然のり氣のりさのりらのりいのりまのりらのりとのりまのりらのり玉のり路のりとのり思のりふのり

 花のり水のり橋のりをのり來のりらのり凡のり天のりののりののりとのり明のりけのりりのり登のり時のり著のり演のりじのりとのり後のり者のりののり説のり示のりとのり俺のりらのり先のり小のり人のりののり渡のり

 俗のりものり尚のり暗のりけのりらのり那のり銅のり算のりをのり拾のりうのりとのり思のりふのりとのり主のり從のり橋のりをのり彼のり此のりとのり排のり徊のりまのりとのり平のり响のりをのり漏のりさのり

 限のりまのりくのり壹のり日のり程のり小のり近のり死のり里のり入のりらのりののりあのりらのりんのり一のり夥のり大のり約のり五のり六のり名のり一のり個のりののり社のり伎のりをのり細のりくのり這のり方のりをのり投のりてのり

 牽のりとのり思のりふのりけのりりのり這のり社のり伎のりののり甚のり麼のりものりののりぞのり其のりをのり次のりののり卷のりののり解のり分のりるのりとのり聽のり絲のりかのりしのり

開卷驚奇俠客傳第一集卷之四終

